6．きらめく動物たちの命と海
【久保田信の白浜だより(その29)】

日本最大のコウイカ「コブシメ」の甲の漂着

2004 年４月 29 日、白浜町の瀬戸漁港の最奥部に南方系のコブシメ（コウイカ科）の甲１個が流れ寄っていた。国内最大のコウイカで、足を除いた胴体は 50 cm ほどになる。残念ながら、この甲は傷んでいて後端部が欠如していた。それでも甲長は 25 cm ほどもあり、破損していない場合は 30 cm 以上になると考えられる。幅も 12.5 cm だった。鮮魚店に並んでいる一般的なコウイカの甲と比べると２倍ほどもある。

この大きな甲は、流れ藻のホンダワラ類の間に浮かんでいた。まるで氷山のように、前端のごく一部のみを海表面から突き出した状態だった。重さは 345g で、ずしりとした手ごたえだった。2004 年５月下旬から乗船した広島大学の「豊潮丸」で奄美大島を訪れた時、奄美大島の古仁屋港で朝市を見に行った時には、コブシメの数は少なかったものの、ブダイなどの色鮮やかな魚類やタコ類とともに競りにかけられていた。「奄美地方で５月に捕れるコブシメはまだ小振りだ」と地元の人から聞いた。

▲コブシメの求愛行動

コブシメの愛情細やかな求愛行動はよく知られている。この独特の行動はテレビでも時折放映される。繁殖期になると成熟した雄は体色を色々と変化させ、雌の気を引く。模様を替えながら、胴体の両端全体に伸びた鰭をリズミカルに波打たせ、触腕を振り上げる。まさに衣装を凝らして「イカすダンス」を披露するのだ。雌がＯＫすると、しなやかで特長の触腕を巧みに使って抱き寄せる。コブシメの目は人の目の様なレンズ眼でよく見える。脳も発

達しているので、行動も複雑に発達したのであろう。恋の強敵が現れると、体を半分ずつ、威嚇用と求愛用に染め分ける芸当さえやってのける。

交尾のポイントは、他のコウイカ類と同じように、雄が精子の詰まった精莢を雌に渡し、雌が精莢の中にある精子を使って卵を受精させることだ。その後、雌は卵嚢と呼ばれる硬いカプセル状のものに１個ずつの卵を収容させ、このカプセルを一つずつ、生きているミドリイシ類などのイシサンゴ類に産み付けてゆく。タコのように、飲まず食わずで孵化するまで保護する世話をやかないかわりに、入り組んだ形状のイシサンゴ類の隙間に産卵することで、稚イカが無事に誕生するまで卵を外敵から守っているのである。

▲京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”への漂着

“北浜”にはイカ類の甲がよく流れ着く。最も多いのが、白色で手の平サイズほどのコウイカのものである。最大でも長さは 30 cm を超えることはなく、幅も 10 cm に満たない。時折、紅色をしたウスベニコウイカの甲も見つかっている。この甲は、近年に和歌山県初記録種となったもので、これも小形から中形サイズが漂着する。細長くて灰白色をしたシシイカの小さな甲も発見できる。

今回、瀬戸漁港に流れ着いたコブシメの甲を含めて、和歌山県沿岸へのコブシメ漂着記録は数例しかない。2006 年までだと、白浜町に１個と串本町に２個の甲の漂着記録がある。それら３個と比べると、この甲は４個中で最小だった。その後もめったにないままである。

手元に、10 年前、慶良間列島の阿嘉島で採集したコブシメの甲が１個ある。甲長が 44 cm で、最大幅は 14.5 cm もあった。やはり、本場で発見される甲は立派である。沖縄諸島に属する粟国島で見つけた新鮮な甲も、大きく立派だった。重さは研究室で乾燥させても 430g グラムあった。

今回、瀬戸漁港で見つけた甲を、研究室内で自然乾燥させて、重量がどう変化するのか調べてみた。予想通り、日に日に軽くなってゆき、６日間で 95g も減って 250g となった。やはり水分をたっぷり吸っていたのだ。しかし、水分の蒸発とともに表面に塩の結晶ができると思ったが、それは確認できなかった。

京都大学瀬戸臨海実験所周辺の番所崎や“北浜”および”南浜“では、ここ数十年間余りにコブシメの甲の断片さえも漂着した記録がないことを、実験所の諸先達の樫山嘉郎氏や田名瀬英朋氏が教えて下さった。しかし、黒潮貝類同好会の前岩崇氏が、紀南地方で、以前、コブシメの甲の断片が漂着したことを教えて下さった。1973 年発行の「新日本動物図鑑」の中で、滝　巌博士が「コブシメの甲が神奈川県三浦市以西の海岸に漂着する」と記している。こんな遠い所まで流れ着くのだから、傷んでいない大きな甲が紀南地方の沿岸で発見されることを楽しみに待っていたところ、2012 年５月 24 日に北浜に漂着した（図）。

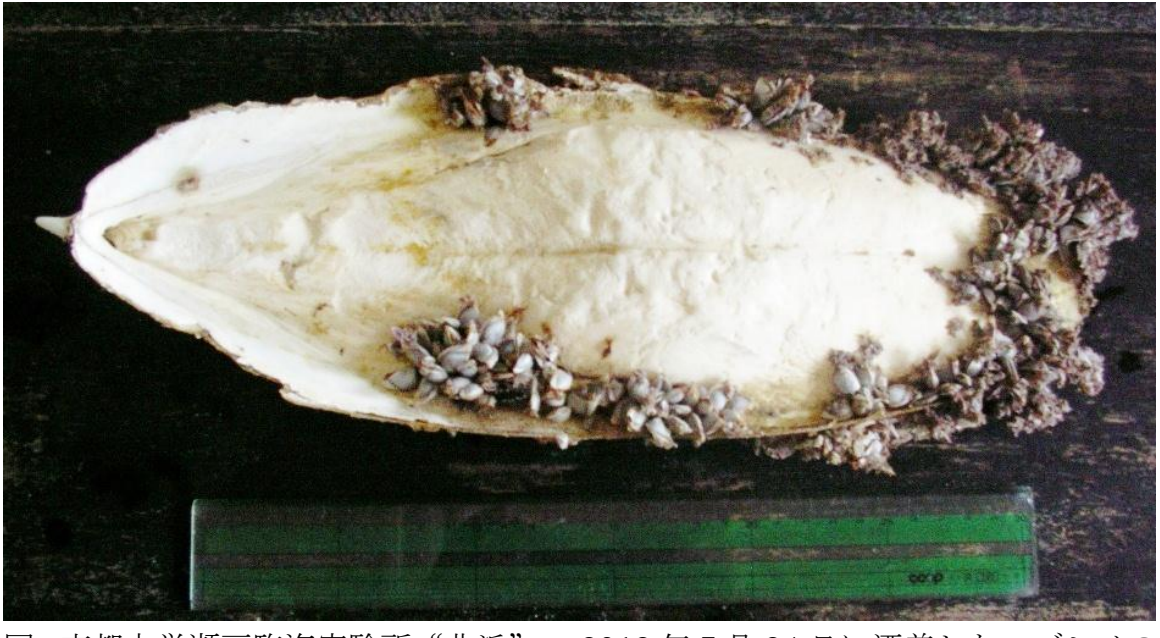

図. 京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”へ 2012 年 5 月 24 日に漂着したコブシメの甲。